

主 題：主を畏れる生き方2

聖書箇所：コリント人への手紙第二 5章11－19節

私は私のために死んでくださった方のために生きる、そのとき私のたましいはどんなに喜ぶだろう、救われた喜び、クリスチャンはその喜びに満たされている者です。だからパウロは私たちに「主を畏れて生きる」ことを教えたのです。パウロはまちがいなく主を畏れて生きていました。それは彼が救われる前、自らの罪を覚えて、その罪がさばかれるというそのさばきを恐れて生きていた日々とは違います。神はそのような罪の中を歩んでいたパウロを救い出し、神を怖がるのではなく、神を敬うという畏敬の念をもって生きる者へと変えてくださったのです。ですから、「主を畏れて生きる」ことは私たちにとって無理なこと、できないことだとパウロは教えているのではありません。イエスを信じて救われた者は主を畏れる者として生きるのです。そのように主が私たちを変えてくださったのです。ほんとうのクリスチャンは主を畏れて生きる者です。主を畏れて生きていたパウロにも様々な誘惑がありました。つまり、主を畏れて生きないようにする誘惑です。そのような中でパウロは勇敢にそれらの誘惑に打ち勝って、主を畏れる歩みを継続しました。そして彼は、その秘訣を私たちに教えてくれました。どうすれば、主を畏れる生き方をし続けて行けるのか、そのような生き方を歩み続けて行けるのかを、パウロはコリント教会の兄弟姉妹に、そして、私たちに語ってくれるのです。

前回、5：9－10を通して、主を畏れる者として私たちが生きて行くために必要なその秘訣を見ました。それは**「キリストのさばきの座の現実を覚えていつも生きなさい」**ということでした。私たちクリスチャンは必ず、いつかキリストのさばきの座に立ち、私たちのクリスチャンとしての歩みの評価がそこでなされる、その日が明日かもしれないし、半年先、1年先かも知れないが、確実にその日はやって来るのだから、その日がいつ来てもいいように今日を生きて行きなさいと教えたのです。クリスチャンは自分の歩みをよく吟味し、身を正して生きて行くことが必要です。なぜなら、クリスチャンは例外なくキリストのさばきの座に立つからです。パウロはこのコリント教会のことを心に掛けていました。このみことばを見ると、当時のコリント教会がどのような問題に遭遇していたのかが分かります。今日のテキストは5：11からです。「**こういうわけで、私たちは、主を恐れることを知っているので、人々を説得しようとするのです。私たちのことは、神の御前に明らかです。しかし、あなたがたの良心にも明らかになることが、私の望みです。：12 私たちはまたも自分自身をあなたがたに推薦しようとするものではありません。ただ、私たちのことを誇る機会をあなたがたに与えて、心においてではなく、うわべのことで誇る人たちに答えることができるようにさせたいのです。：13 もし私たちが気が狂っているとすれば、それはただ神のためであり、もし正気であるとすれば、それはただあなたがたのためです。**」とこのようなことをパウロは言ったのです。さて、教会に何が起こっていたのでしょうか？偽りの教師たちが教会の中に入り込んで、パウロの使徒としての資格に疑いをもたせ人々を混乱させたのです。同時に彼の品格を否定しました。そのようなことがこの教会の中にあつたので、パウロはこのような様々な惑わしを教会の中から払拭しなければならないと考えました。そのためにパウロは彼らに11－13節で、自分がこれまでにして来た信仰者としての歩みは、主の前に忠実で誠実な歩みであつたということを明らかにしようとするのです。彼が言いたいことは、私は神の前に動機においても、行動においても喜ばれることをして来たということで、そのように彼らに宣言するのです。13節のことばはパウロの生き様を私たちに教えてくれるみことばです。どのようにパウロが生きたかです。二つのことがあります。彼は主に対して熱心でした。そして、同時に人々に対しては冷静に、ここでは「正気で」とありますが、そのようにふるまつたのです。どういう意味でしょう？パウロは主を愛するがゆえに、この主に熱心に忠実に従って行こうとした人物です。彼はそのように生きました。救われてからの彼は、福音宣教のためならどこにでも出かけて行き、一人でも多くの人にすばらしい神を伝えようと働きました。アジアだけに留まることなく、ヨーロッパに出て行き、スペインにまで行こうとしました。神が機会を与えてくださるならどこへでも出て行きました。だから、人々は彼のことを「ペストのような存在」だと言つたのです。伝染病のように広がって行くと。人々にはパウロは異常に映つたのです。余りにも熱心だったゆえに「パウロは気が狂っている」と言われたのです。残念ながら、私たちのこの社会においても、神に対して熱心であれば人々には異常に映るのです。一生懸命主のために働いていると、あの人は変わっている、そこまでしなくても…と非難されます。しかし、パウロは私は気が狂ってはいない、あなたがたにそうするのは私が神に対して忠実に生きて行きたいからだと言うのです。今、必要とされているのはそのような人々です。パウロがそうであつたようにキリストに対して熱心に忠実に生きる人々です。そのような人々が私たちの国には必要なのです。もしかすると私たちは世と余りにも妥協し過ぎて、世の人々が見て私たちがクリスチャンであるかどうか分か

らない、というようなことはないでしょうか？間違いなくパウロはそのような人物ではありませんでした。パウロが私たちに証してくれることは、私は神を愛するゆえに、この主に喜んでいただけることであれば何でもすると言うのです。私は主のために生きると賛美しながらそのように生きていないなら偽善者です。神はそのことをご存じです。だから、キリストのさばきの座を覚えて日々を生きなければならないのです。

パウロの熱心さは人々には気が狂っているとしか見なかったのです。パウロは言います。「**正気である**とすれば、それはただあなたがたのためです。」と。パウロは人々にこの救いのすばらしいメッセージを知ってほしかったのです。だから、彼は感情的ではなく冷静に忍耐をもって、この福音のことばを語り続けたのです。11、12節を見ると、パウロは何か自己弁護をしているように思われますが、そのようなことはパウロの関心ごとではなかったのです。なぜなら、「**私たちのことは、神の御前に明らかです。しかし、あなたがたの良心にも明らかになることが、私の望みです。**」とあるように、人々の自分への評価はどうでもよい、キリストのさばきの座において神が評価されるからと言います。私たちクリスチャンもそのようにあるべきです。そして彼は、神はご存じだけれど、私がどのような動機で、思いで働きをしているのかをあなたたちにも知ってもらいたいのだと願いました。なぜなら、リーダーに対する批判というのは教会に大きな分裂や分派をもたらすからです。教会にそのようなことが起こるなら神の祝福はありません。だから、パウロは自分がどう見られるかではなくて、このような間違った考えや意見が教会の中に入り込んで、人々が惑わされてしまって一致が乱れ始めている、教会が成長して行かない、ゆえに自分の真実な動機を説明しようとしたのです。パウロが自分のことを考えていなかった理由は13節に「**気が狂っているとすれば、それはただ神のためであり、もし正気であるとすれば、それはただあなたがたのためです。**」とある通り、自分のことは一切言っていないことです。このようなパウロの生き方を見たとき、イエスのもとに来て、神に喜ばれることは何かを質問した人に対してイエスがお答えになったこと「神を愛しなさい、隣人を愛しなさい」というみことばを思い出します。パウロはそのように生きていたのです。そのことを彼はコリント教会の人々に対してもう一度明らかにしようとしたのです。それによって、惑わされている人々がその惑わしから解放されて、再び主を畏れる者として生きて行くことをパウロ自身が望んだのです。

私たちが主を畏れる者として生きて行くために覚えておかなければならないことの一つ目は、キリストのさばきの座が現実のものであるということです。私はキリストのさばきの座に立つのだということです。そのことを覚えて今日を生きて行くようにと。二つ目に彼が教えることを14節から見て行きましょう。

II. キリストの愛を覚えて生きなさい

14節に「**というのは、キリストの愛が私たちを取り囲んでいるからです。**」とありますが、主を畏れる生き方をしている、その説明、理由を述べているのです。この「**取り囲む**」ということばが大切です。この動詞は支配するという意味ですが、「追い立てる、駆り立てる、促す」という意味ももっています。ここには「キリストへの愛が」とは書いていません。つまり、パウロが神をどのように愛するかということではありません。神がどれほどパウロを愛しているかということです。神の愛です。つまり、パウロが言いたいことは、キリストの愛を覚えるときに、それが私にある生き方を促してゆく、駆り立ててゆくのだということです。キリストの愛を覚えるときそこから新しい生き方が生まれて来るということです。しかも「**取り囲む**」は現在形で継続を表わします。このキリストの愛がずっと私の心を捉えて私に新しい働きをするように駆り立てているということです。だから、パウロはこのキリストの愛を知ったときに、「**私たちはこう考えました。**」と言います。これは「見なす、判断する、決心する、決定する」という意味をもったことばです。「**考えました**」はもうすでに起こったできごとを指しています。パウロがキリストの愛を知りイエス・キリストを信じたときに、ある決心をしたのです。このように生きて行こうと選択をしたのです。そのことについてこのように説明します。三つの選択をしたと言います。それが次に記されています。

(1) 新しい人生観をもって生きて行こうとした 14-15節

新しい人生、それは神のために生きる人生だとパウロは言います。14節の後半と15節に「**ひとりの人がすべての人のために死んだ以上、すべての人が死んだのです。：15 また、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。**」とあります。「**ひとりの人**」とはイエス・キリストのことです。「**すべての人**」とはすべての人間です。ではなぜ、イエスはすべての人間のために死んでくださったのか、その理由をここに見るのです。一つ目は「その死は私たちの身代わりであった」と言います。「**すべての人のために**」というのはイエスが何か悪いことをして、自分の犯した罪のために死んだのではなく、あなたのために死んだと教えているのです。聖書が明確に教えていることは、イエスの死は私たちの身代わりであったという

ことです。創造主である神によって造られた私たちは、神に対して大きな罪を犯しています。さばかれてしかるべき私たちにイエスが代わってその罪の罰を受けてくださったのです。そのことをパウロはここで言ったのです。二つ目に「キリストのために生きるために」キリストは死んでくださったと言います。15節に「**キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。**」と教えてくれています。私たちがこの地上で主のために生きて行くためであると。このみことばの最後に「**生きるためなのです。**」とありますが、これはパウロ自身が自分もそのようにしているから、あなたもそうしましょうと激励を与えているのです。コリント教会の兄弟姉妹たちの状況がよく分かっていたので、何とか彼らを励まして、彼らがほんとうに主を畏れて生きて行くようにと望んだのです。

パウロがイエスを信じたとき、キリストの愛が分かったときに、私は新しい選択をしたと言います。新しい人生観をもって生きるのだと。もう私は残った人生をこれまでと同じように自分のために生きるようなことはしない、これから私は私を愛してくださり私のためにいのちを捨ててくださった、私に罪の赦しを与えるために罪のないいのちを犠牲にしてくださった、この主のために生きて行くのが私の新しい歩みですということです。神のために生きるということは、クリスチャンだけでなくすべての人間に神が要求していることです。なぜなら、イエスはすべての人のために死なれ、すべての人のために罪の赦しをもたらされたからです。それは、すべての人がこのキリストのために生きるためです。よく受ける質問ですが、私たち人間は何のために生きるのかということ、それは聖書を見れば明らかです。私たちを造ってくださった神のために生きることです。ここに問題があるのです。私たちはイエスを信じる前は自分のために生きてきました。自分を喜ばせるため、自分の快楽を求めて生きて来しました。神が託してくださった人生なのに、自分の人生だから自分のために生きようとして神のために生きないで、神に対して罪を犯してきたのです。ここに罪があるのです。聖書が教えているように、私たち人間は私たちを造ってくださった神のために生きるという責任を負っているのに、その責任を果たしていないのです。だから、神のみこころに反して生きているのです。神が望んでおられることと違うことをしているのです。だから私たちは罪人でありさばかれるということです。道はずれているからです。パウロは分かったのです。私は間違っている、私は私を造ってくださった方のために生きるはずだと。私をこんなに愛してくださって、ご自分のいのちさえ惜しまずに与えてくださった方のために生きるはずだと。

パウロはこれからも同じことを繰り返して言うのですが、パウロが私たちに証する救いというのは、「あなたは天国に行きたいですか？それならイエスを信じなさい」というメッセージではありません。これは他の宗教もいっていることです。天国に行くために何々をしなさいと。しかし、聖書が言っていることは違うのです。聖書はあなたはさばきにふさわしい罪人だと言います。造られた目的からはずれて生きていると。あなたは間違っている、だから、その罪を悔い改めなさい、そして、神が備えてくださった救いを受け入れなさいと言います。神に逆らい続けながらイエスを信じることなど不可能なことです。私たちが何のために造られ何のために生かされているのかが分かれば、そのように自分自身生きているのかどうか考えることです。もしそのように生きていなければ、その罪を悔い改めて神の前に正しく生きる選択をすることです。パウロはそのように選択したのです。新しい人生観をもって神のために生きる人生を歩み続けると。これが救いです。パウロは生まれ変わったのです。この後に教えています。神のために生きること、それが救われた目的です。あなたはその選択をしているかどうかです。この選択というのは、神が救ってくださったならあなたの心にこの思いが確実に与えられて行くのです。

(2) 新しい価値観をもって生きて行こうとします 16－17節

「16 ですから、私たちは今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。:17 だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」

パウロは神の価値観をもって生きて行くという選択をしたのです。神の価値観です。これまでは人間的な価値観をもってすべてを見ていましたが、もう人をえこひいきしたり差別したりしないと言います。なぜなら、「**神にはえこひいきなどはないからです。**」(ローマ2:11)とあるからです。また、エペソ6:9にも「**主人たちよ。あなたがたも、奴隷に対して同じようにふるまいなさい。おどすことはやめなさい。あなたがたは、彼らとあなたがたの主が天におられ、主は人を差別されることがないことを知っているのですから。**」とある通りです。人をえこひいきしたり差別するのは人間です。人種であったり、社会的地位であったり、富や財産であったり、肩書きであったり、家系や職業などによって人を評価したり、人の価値を計ったりはしない、これまでの自分はそうであっても救われた私はもうそのようにはしないとパウロは言います。これは人間の本質的な罪です。私たち日本人はいろいろな偏見をもっています。特に東南アジアに対しては欧米に対する態度と違います。飛行機に乗るとそれが明らかです。また、お金があれば何でも好きなことができる、そのようにふるまっていると見られているのです。非常に恥ずかしいこ

とです。教会の中にあつて偏見をもって人を見るということは大きな罪です。パウロはⅠコリント3：3でこのように言います。「**あなたがたは、まだ肉に属しているからです。あなたがたの間にねたみや争いがあることからすれば、あなたがたは肉に属しているではありませんか。そして、ただの人のように歩んでいるではありませんか。**」、そのように人を偏見をもって見たりさばいたりするのは信仰的に幼稚だからだと言います。ガラテヤ5：15には「**もし互いにかみ合ったり、食い合ったりしているなら、お互いの間で滅ぼされてしまいます。気をつけなさい。**」とあります。海外の教会に行くといろいろな人種の方がいます。ところが日本ではほとんどが日本人です。海外では日本人教会という看板が上がっています。本来、教会はすべての人の教会です。人種もハンディも関係ないのです。神はすべての人を平等に見ておられ平等に愛しておられます。それなら私たちも同じようにするべきです。神の価値観をもって接することです。パウロはそうにしました。かつては確かに人間的な標準でキリストを見ていたけれど、それが間違っていることに気付いたのです。神の基準から見ると、イエスは唯一の救い主であり、唯一人となってこの世に來られた神だと。だから、もう人間的な価値判断ではなく、神の価値観で物事を見て行くのだと言います。

なぜそのようにするのでしょう？17節を見ると「**だれでもキリストのうちにあるなら、**」とあります。これは救われた人のことです。キリストのうちにあるというのは、キリストによって受け入れられた人だからです。生まれながらに私たちはキリストのものではなく、サタンのもの、サタンに仕える者でした。そのような私たちがキリストのうちに入れられ、サタンの支配から解放されて神のものにされたのです。キリストのうちにあるということは、神のうちにしっかり守られているということです。キリストの祝福が永遠に与えられ続けるのです。キリストのうちにある者は幸いな者です。

続いて見ると「**その人は新しく造られた者です。**」とあります。これは生まれ変わった人です。ユダヤ教の教師たちは、罪が赦された人のことを説明するときにこのように「**新しく造られた人**」と言います。だから彼らによれば、これは罪が赦された人のことを言っているのです。

三つ目に「**古いものは過ぎ去って、**」とあります。ここで使われている時制は、もうすでに実際に起こったこと、もうすでに決着したこと、もうすでに完了したこととしてパウロは言っています。罪のために滅びるべき私はもう死んでしまったと。そして、「**すべてが新しくなりました。**」と言います。これも完了形ですが、もうすべてが過去に新しくなり、その状態が現在も継続しているということです。生まれ変わって今も新しいいのちをもって生きているということです。これが救いです。自らのすべての罪がもう完全に赦されて新しい者とされたのです。その新しく造られた者、救われた者は新しい歩みをするのです。新しい人生観を持ちます。神のために生きようとします。正しい神の価値観を持っています。ローマ6：4に「**私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあつて新しい歩みをするためです。**」とある通りです。

(3) 新しい使命を持って生きて行こうとします 18－19節

「**18 これらのことはすべて、神から出ているのです。神は、キリストによって、私たちをご自分と和解させ、また和解の務めを私たちに与えてくださいました。19 すなわち、神は、キリストにあつて、この世をご自分と和解させ、違反行為の責めを人々に負わせないで、和解のことばを私たちにゆだねられたのです。**」

新しい使命、新しい務めが与えられたのです。この福音を伝えて行くという務めです。パウロはこう言いました。「**違反行為の責めを人々に負わせないで**」と。違反行為を行なったのは私たちです。当然その罪に対して報いを受けるはずですが、神に対して犯した罪は自ら刈り取らなければなりません。しかし、神はそのさばきを私たちに負わせる代わりに、私たちに救いをくださったのです。そして、救われた私たちに神はこのすばらしい救い主のことを伝えて行くという務めを与えられたのだと、パウロは言うのです。本来なら私たちはさばかれてしかるべきです。自分の行なった罪の報いを受けるべきです。しかし、神はそうにせず、その報いをキリストに負わせ、私たちを救ってくださったのです。そして、神のために仕えるという特権を与えてくださったのです。キリストの福音を伝えて行くという、こんなにすばらしい和解のことばを語るといふ務めを私たちに与えてくださったのです。だから、パウロは一生懸命語ったのです。世の人々にここに救いがあること、ここに希望があることを明らかにしたのです。パウロはローマ5：10－11で「**もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。11 そればかりでなく、私たちのために今や和解を成り立たせてくださった私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいるのです。**」と言っています。今この世では苦しんでいる人、悩んでいる人がほんとうに多くいます。希望のない人があふれています。神が私たちを救ってくださった目的は、このように神を知らずに永遠の滅びに向かい希望のない人々に対して語るメッセージがあるということです。ここに救いがあること、そして、私たちは自らの人生に起こったことを確信をもって人々に語ることができるのです。キ

リストこそが救い主であることを。だから、パウロは信じたときに決心をしたのです。この使命を果たすために私は生きて行くと。

主を畏れる生き方をパウロは私たちに教えてくれました。彼自身の生き方です。キリストのさばきの座を覚えて生きること、キリストの愛を覚えて生きること、あなたが救われているなら、間違いなくあなたの中にその思いがあるはずです。主に喜ばれることをして行きたい、この主のために生きて行きたい、この主のすばらしさを語って行きたいという思いがあるはずです。もしそうでなければ、あなたの信仰はおかしいのです。たとえ信仰を告白していようと、バプテスマを受けていようと問題ではありません。神が問われているのはあなたの心です。心からイエス・キリストに従って行くという選択をしたかどうかです。その選択をしたのなら、神はあなたのうちに働いて新しい思いを与えてくださった、なぜなら、あなたは生まれ変わったからです。主を畏れて生きる人こそほんとうのクリスチャンです。そして、パウロは私たちの弱さを知った上で、しっかりこの二つのことを覚えていなさいと言うのです。そして、私もそうだったようにあなたも主を畏れて歩み続けなさいと励ましてくれるのです。そのように生きて行きましょう。